



高木市之助全集

第七卷

講談社



高木市之助全集 第七卷

定価三八〇〇円

日本文学の環境・他山録

昭和五十一年十二月二十日 第一刷発行

著者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二・郵便番号一二二
電話・東京(〇三)九四五―一二二(大代表)
振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十一年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I 日本文学の環境

日本文学の環境	1
再刊の序	3
序	5
一 環境の意義	8
二 日本文学の環境	14
三 記紀文学	21
四 万葉文学 その一	26
五 万葉文学 その二	33
六 万葉文学 その三	55

七	中世文学	その一	77
八	中世文学	その二	94
九	中世文学	その三	112
十	近世文学	その一	120
十一	近世文学	その二	126
	結語		139
	景		141
	牡丹芳		154
	日本文学と風土		161
	日本文学における自然観の変遷——上代・平安		174
	源氏物語の風土		188
	風土と人間——源氏物語		193
	国文学の読み方		205
	国学の再検討という問題		220

文藝学	233
-----	-----

漢字の移入と古代文学	241
------------	-----

上古の文学史	258
--------	-----

源氏物語の再評価	272
----------	-----

Ⅱ 他山録

他山録 一——バウンドの「詩の起原」	283
--------------------	-----

他山録 二——「人形劇の主役」を読む	297
--------------------	-----

他山録 三——「人形劇の主役」を読む（承前）	307
------------------------	-----

源氏物語の英訳	316
---------	-----

その後のエリセエフ氏	326
------------	-----

国文学と日本文藝学	336
-----------	-----

物語の歴史	348
-------	-----

芳賀博士の学風	369
---------	-----

国文学と国文学	385
日本文学の理會とその技術について	398
明治天皇御百首	405
第一章 序 説	408
第二章 まことの道	412
第三章 神路山	422
第四章 民草	431
第五章 わがくに	445
第六章 心の花	450
第七章 夏草の露	473
第八章 遠山の雲	480
第九章 しづが垣根	490
第十章 草枕	495
第十一章 松の古葉	504
第十二章 結語	513
解説	518
須藤松雄	
中西達治	530
解題	530

I 日本文学の環境

再刊の序

正直に言つて、本書が旧態のままで、再刊されることは私にとっては一面まことにつらいことでもある。なぜなら、原本の序で私がかずかずの言いわけの中の、「主なもの一つ二つ」として記していることさえ、もう一度そのままで「考えなおしたり書き加えたりする」ことなしに読者にまみえなくてはならないからである。

そこで二重の言いわけになるが、自然環境をもう少し社会環境との相関において考えるということがこの再刊でやはりそのままになっていることは、本書としてはまことに痛いことであるが、私としてはその後多少ともこの方面へ考え方をふりむけていつてはいる。それは本書とほぼ同時に出版されることになっている拙著『古文藝の論』（——本全集第六卷所収——）に収めた諸論考を読んでいただければわかる。

本書が「明治以降にわたりえなかった」「残念」を私は現在まで持ち越しているが、この点事情は現在も当時とまったく同様である。つまりその後もしも引き続き古典と取り組んでいるために、ときたま原稿を書く時間ぐらいはできても、明治以降の關係作品を一度熟読するだけの時間を浮かすことができない。だからこの点は仮りに書房の方から勧められても私としてやはりできない相談だった。もち

ろん、いつかは書き足したいという希望を捨てたわけではけっしてない。

それから、この機会にもう一度本書を読みかえして気がつくことは、この本の出た時分に比べると、さすがにいまの私は私なりにいくらかでも成長してきたナということである。そうした成長については、折りにふれて、講座・雑誌その他に発表する諸稿を読んでいただくほかはないが、こうした諸稿のいわば原型として、本書をもう一度再刊して保存することは、少なくとも私にとって無意味ではない。こんな気持ちで私は手を入れないままの原本の再刊という書房の申し出を認めた。といつては、言いわけのまた言いわけになってしまうかもしれないけれど。

一九五二年五月一日

高木市之助

序

自然は日本文学でおよそどのような姿をしているか、これが本稿の課題であり発足点でもあった。しかし書いていくうちに私はだいぶ側道へそれたり道草をくったりしてしまつて、それは必ずしも結論でも帰着点でもなくなつたかもしれない。

しかも一方私の身辺の繁忙は締め切りへ私を追いつめて、考えなおしたり書き加えたりする時間を絶対に与えてくれないでしまつた。私はいつにない不安と危惧とでいま校正刷を待ちおそれている有様である。

したがって稿を終えたいま、読者へ（というよりもいっそう自分自身へ）言いわけをしたいことはいくらかあるが、中で主なもの一つ二つを記させていただくならば、

最初は、自然を対象としながらも、もう少し社会的環境との相関を考えてみたかったが、これは紙幅のつごうもあつて断念しなければならなくなつた。しかしこうした自然の姿がなにがゆえに現れたかというふうな問題に前方に押しやることも可能であつて、そうすれば一応純粹にこうした関連のみを採りあげるのも、そうしたことを考えていく人々に一つの前提になるのではないかとも思う。

るべきであつたが、それは原稿を書く時間というよりも、私のように平素古典ばかりあさっている者には、もう一度読みなおす時間が必要であつたので遺憾ながら切り捨ててしまった。

古代にくわしく、近世に手薄なのもまことに心がかりである。これは自然との関連そのものがそうなっていると稿の中では弁じておいたが、それにしても近世はあまりに簡単に片づけすぎた憾みをもつ。これも私の知識の偏倚と時間の不足とからくる当然の結果で責任はもちろん私自身にある。深くお詫びをしなければならぬ。

ただこれらの言いわけが際限もなく考えられるにもかかわらず、日本文学の環境的関連について日ごろ考えていたことだけとはにかく言いえたことに満足し、この稿を書きながら新たに考え得たことについては他日改めて静かに筆を執る機会を作りたいと思っている。

昭和十三年十一月十三日 稿を終りて

稿 者

日本文学の環境

一 環境の意義

文学における環境とはなんであるか。これは常識的にも、学問的にも多くの見解を予想しうると思われるが、この小冊子においてそうした見解のいろいろの可能性を採りあげて、一々検討批判していくことは不可能であるから、便宜のために、ここで考察の対象として考えたく思っている「環境」について、私自身の意味を規定しておきたい。

文藝の本体本質がなんであるにせよ、文藝が文藝として社会に通用し、また学の対象として文藝学が成立するためには、それは必ず客観的な存在でなければならぬ。

それでは文学のこうした客観性はどこにあるか、したがってまた文学を対象とする学（仮りに今日の通用語によって文藝学と呼ぶことにするなら、以下これにならう）においていかにしてその対象の客観性を把握すべきであるか。ここに文藝学が、その方法論において、あるいはそれ以前において、負わなければならぬ一つの宿命的な悩みがあるのであり、観方によっては、文藝学はここにややもすればその対象を見失おうという危機をはらんでいるのであるが、こうした根本的な問題を正面から考えることは本稿の目的ではないから、ただちにこの問題と本稿にいわゆる環境との関係について考えてみるに、管見にしたがえば、われわれは文学がそれ自身を客観化する一つの契機として環境を考え

ることができる。換言すれば作品は作者の創作や読者の鑑賞との関連において主観的な存在であるように、これらの作品が生産される環境との関連において客観的な存在である。したがって文学をその環境との関連において把握することはひきょう文藝学が、その対象に客観性を与える少なくとも一つの方法でなければならぬ。

さらに管見にしたがえば、環境は二つの範疇にわけて考えることが可能である。一つは空間的な延長のうえに考えられるもの、すなわち風土であり、もう一つは時間的な延長のうえに予想されるものすなわち文化である。風土とは天候、気象、動植物等自然に即したもので、特にこれを文藝の立場からすれば、これらのすべては景観を主とする感覚的表象として文藝の諸構造に参与する。もちろん風土といっても時間的でないはずはなく、それらは天体とともに流転し、地球とともに推移していくは相違ないが、こうした幾千年か少なくとも幾百年かを単位として考えられるような流転や推移は文学の環境としては無始無終にもひとしい。この意味において風土は、少なくとも文学の環境としてのそれはまずもって空間的な存在なのである。つぎに文化とは諸般の文物制度を包摂する人間的、社会的所産の総合であって、それが人間ないし社会に即している限り歴史性を離脱することはできない。もちろん文化にも空間的な延長が考えられないわけではないが、もし「日本」というように、限定された一つの特定の文化を考える場合、まずもって要請されるものはその歴史的な把握でなければならぬ。少なくとも文学の環境としての文化はその歴史性を主として考えなければならぬ。かくのごくして環境の二つの範疇、風土と文化、空間的なものと時間的なもの、自然的なもの、人間的なもの、この二つの光線をクロスさせたところにわれわれは客観的な日本文学の正しい姿を照らし出すことが

可能なのであろう。

ところで本稿の企図するところは、両者のうち、主として風土的なものを採りあげ、文化的なものはそれが前者と相關的に連なる場合のほかはいっさい触れないことにする。理由は一つには紙幅と時間とにその余裕が無いためであるが、一つにはまた、文藝学におけるつぎの実情を考えたためである。すなわち文化的環境を考へること、あるいは少なくとも文化との関連において文学を考へることは、その態度あるいは角度の正否はとにかくとして今日すでに相当の研究があらわれ、あるいはあらわれようとしている。本叢書だけについて考へても、各時代史あるいは各様式史は、それが真に「歴史」であるためには必然にこうした方向に関連をもつてくることを予想されるのであるが、風土との関連において日本文学を考へること、ことにこれを文学の「環境」として考察するという方面は、今日かなり手薄な実情にあるのであって、この点文藝学の構造としてやや均衡を失するきらいがあり、日本文学の客観的に正しい姿を見きわめようとする場合この不均衡はやがて、その姿を歪めて見せることになりはしないかとも懸念されるためである。

したがって本稿において「環境」と呼んでいこうとするものは、実は上述二つの範疇の中の一つ、いわば風土的環境あるいは自然環境とでも呼ぶべきものであるが、一々このようにことわることの煩を避けて、以下こうした自然に即した環境を単に環境とのみ呼んでいくことを約束したい。

さて、環境とは、上述の意味においては、空間的に文学をとりまくものであり、それがもう一つの文化的環境と対比される場合、広義の「自然」と置き換えても差し支えないわけであるが、しかし、